

感情スクリプトと第2言語コミュニケーション

Emotional scripts and second language communication

八島 智子

YASHIMA Tomoko

This paper reviews research on the emotional experiences of bilingual speakers from a cultural psychological perspective, using the framework of emotional scripts that are socially shared and acquired as cultural models. The experience of bilinguals tells us that they switch from one language to another depending on numerous factors including relative proficiency in the two languages and the history of acquisition, perceived emotionality as well as the affective resources offered by the languages. Secondly, the possibility of acquisition of emotional scripts by L2 learners through intercultural contact experiences is considered based on past research. Finally, educational implications are discussed.

キーワード

感情スクリプト (emotional scripts) バイリンガリズムと感情 (bilingualism and emotion)

第2言語学習者の感情表現 (expression of emotions by L2 learners)

第2言語コミュニケーション (L2 communication) 文化心理学 (cultural psychology)

はじめに

第2言語を使ってコミュニケーションをするとき、人は、しばしば自分が「自分らしくふるまっていない」と感じたり、自己の提示に困難をきたしたり、自分が思うように相手に評価されているかどうか心配になったりする。こういった経験に関係する要因のひとつに、第2言語での「感情の表出」や「感情表現」の問題がある。

本論では、社会・文化心理学における感情の研究に言及しながら、最近応用言語学者が着手している、バイリンガリズム (マルチリンガリズム) と感情の研究を概観する。この作業を通して、第2言語使用者の感情の知覚や表現能力について考え、第2言語習得研究および外国語教育への示唆を論じたい。

I 文化と感情

感情とは何か

エクマンらによると、人間の基礎的な感情には、喜び、驚き、恐れ、怒り、軽蔑、嫌悪、悲しみ、の7つが含まれ、これらは、生物学的プログラムであり、文化普遍的であるという。Ekman & Friesen (1986) は、上記の感情を表す写真を、いろいろな文化の被験者に見せ、その解釈がおおむね一致することを示し、普遍性の根拠としている。これに対し、文化心理学者、北山 (1998) は、われわれが日常経験する感情の多くは、「生物学的、生得的メカニズムの直接の現われであるというより、むしろ、それらと高次の認識のプロセス、さらには人が組み込まれている社会的、文化的状況などが、相互に連携をとりあい、共振することによって、醸しだされた一種の神経・心理・社会的複合プロセスである (p.75)」と考えている。つまり人間が感情を経験するためには、「内的感覚 (身体的・器官的感觉) が個人の回りにある社会的状況の性質、その認識などによって、再構成され、『感情』として意味づけられる必要がある (p.75-76)」とし、感情は社会的なものであると考える。

様々な言語における感情表現の研究をしている、Wierzbicka (1994) は、エクマンの言う基礎的感情は英語の感情をあらわすコトバを基盤にしたものであり、その研究基盤自体にエスノセントリズムが潜むことを指摘する。感情の分類というのは恣意的／解釈的なものであり、カテゴリ化は文化によって異なるとする。Wierzbicka (1994) はポーランド語において、英語の“anger” にぴったりと対応することはないという例をあげているが、世界の言語を見れば感情を表すことばが言語間で必ずしも対応関係にないことを示す例は枚挙に暇がない (Wierzbicka, 1999)。

一方、Panaylotou, A. (2004) はバイリンガリズムと感情の研究を進める出発点として、感情を次の5点から定義している。(1) (血圧の上昇など) 生物学的な兆候が認められる (2)肉体的な経験として境界をもつ、(3)ある状況の認知的評価として理解される、(4)ある文化の意味生成システム内で意味づけられ、学習される、(5)あるコンテキストの中で構成される、(6)ある文化で、その要素をどのように言語として表現し、分類するかによって決定づけられる。

文化的モデルと感情スクリプト

言語使用と感情の関係を考える上で、筆者が興味をもっているのが、感情をスクリプトと見る考え方である。Kitayama & Markus (1994) などは、感情を、「社会的に共有され、集合的に演じられているスクリプトの一種 (p.80)」としている。スキーマ理論によると、スクリプトはイベントスキーマ、つまり、出来事の系列に関する構造化された知識をさす。つまり過去の社会的相互作用のパターンを認知的構造として内面化したものであり、将来起きうる同様の社会的相互作用のための筋書きを提示する。つまりスクリプトとは「社会的、歴史的、文化的

に規定された社会・集团的行動の慣習のパターン、あるいは公にある意味構造である（北山, 1998, p.82）」感情のスクリプトは、生理学的・感覚的要素が、社会状況の中に埋め込まれたものであるといえる。北山は「そこに参加する個人の心理プロセスをその中に含んだ社会的相互作用のパターン」という言い方をしている（p.82）。このように感情をスクリプトとする見方は、その社会的側面を際立たせる。

ある文化の中で経験を解釈したり、行動を選択する際の指針として機能する枠組みを「文化モデル」と呼ぶことがある。Gibbs (1999) によると、文化モデルは間主観的に文化の構成員で共有されるスキーマの一種である。スキーマやスクリプトは前述のとおり、認知科学的な概念であるが、Vygotsky派の研究者、Cole (1996) は、スキーマやスクリプトを頭の中と外で同時に実践に参加するもの、つまり実践を媒介する道具 (artifact) と見ることで、社会に存在するモデルと認知的モデルの二元論を回避しようとした。D' Andrade & Strauss (1992) は、文化モデルの基礎的な要素は、日々の会話の中で、言語化され頻繁に使われ、また規範的な側面をもつという。文化モデルを人間が習得するのは、日々の実践を通してである。日常的に家族や友人と取り交わされる会話の中に、どのようなものや人、行動が評価され、何が大切と考えられるが埋め込まれており、それは意味の交渉を通して参加者のところに刷り込まれていく。文化的実践に参加することで、人はそのコミュニティに共有されているモデルを内面化し、無意識にそれに縛られたり、反抗したりする。感情スクリプトもそういった実践の中での社会化を通して慣習的な反応の型として習得される。同時に、感情を表現する言語も、言語が埋め込まれたスクリプトやその実践を通して習得される。こういった文化モデルや感情スクリプトの習得は第1言語の習得と分離することができない。たとえば、Clancy (1986) は言語社会化のプロセスの中で日本人の子供が「思いやり」や「恥」の感情を習得していく可能性について、日本人の親子の相互作用の質的分析を通して示している。

文化固有の感情

これと関連して、すでに言及した Wierzbicka (1994, 1999) や文化人類学者による、文化固有の感情に関する一連の研究が見られる。つまり、経験される感情がある文化に特有で、それを表すことばが他の言語に見あたらないというような場合を指す。ある言語とその背景となる文化的スクリプトの密接な関係性のため、そして、文化的実践を通して文化スクリプトとして感情を経験する中で、自然に言語を習得するためである。有名な例としては、ミクロネシアのイフォラック (Ifaluk) 語の “song” という感情がある (Lutz, 1988)。“Song” は通常、英語では “justifiable anger” と訳されるが、明らかに英語の anger とは異なった感情である。Lutz によると、song がめざすのは、「感情を害する原因となった人の行動を変えること」であるにもかかわらず、その感情の矛先は、原因となった相手ではなく自分自身に向けられるという。つまり感情を害した相手に向かって感情を爆発させるわけではない。日本（を含むアジアの一

部)の文化固有の感情として知られているのが「甘え」である。土居(1971)によると、「甘え」で表される感情は本来人間に共通の心理を表すが、このコトバが日本語特有であるように日本人に身近なものであり、日本の社会もこの心理を許容するように構成されているとする。つまり、「甘え」が使われる文脈や、甘えが前提とされたり、受け入れられる人間関係のあり方などは、文化的実践に参加することによってはじめて実感できるといえよう。同様に、文化特有の感情といわれるものは、実際にそれに類似した感情が他の文化背景を持った人にも経験されるし、翻訳が不可能ということもないであろう。現に、Lutzは、イフォラック(Ifaluk)コミュニティに参加することにより、誰がどのような状況で、どのような方法で“song”を表現するか、すなわち“song”のスク립トが共同体で共有される過程を分析し提示している。こういった例は、感情が、文化的に構築され、実践への参加によって共有されていくものであることを示している。

感情の比較文化的研究

日本人の感情に関する研究は比較文化心理学者や、すでにのべた土居健朗などいわゆる民族心理学者(folk psychologist)と呼ばれる人の業績がよく知られている。Markus & Kitayama(1991)は、「相互協調的自己(interdependent self)」と「相互独立的自己(independent self)」という文化的自己観の型から、感情経験を論じている。北山は、怒り・フラストレーション・誇りなどは、自分の欲求、必要、目標、能力など(internal attributes)に注目した感情として自我焦点化した(ego-focused)感情と呼び、相互独立的自己観をもつ人が経験しやすいとする。一方、同情・恥などの感情は、他者の存在を意識したものとして、他者に焦点化した感情(other focused emotions)と呼び、相互独立的自己観の持ち主に特徴的という説明をしている。Matsumoto et al.(1988)は、日本人とアメリカ人の大学生を対象にした研究で感情の種類とそれらを経験する時間を調べた。両グループとも、喜び・悲しみをもっとも長く感じ、続いて、怒り・罪、続いて、恐れ・恥・嫌悪という結果を報告している。このように順番自体に差はなかったが、アメリカ人の方が、日本人よりそれぞれの感情を長い時間、またより強烈に(身体的反応を伴って)経験していることを見出した。これについてMarkus & Kitayamaは、対象とした感情のほとんどが自己に焦点化したものであり、相互独立的自己観をもつアメリカ人が経験しやすい感情であるためという解釈をしている。さらに、Matsumoto et al.(1988)では、日本人は親しい関係の相手に対して、怒りを表現しないこと、怒りを感じるのには、主に見知らぬ人に対してであることを報告し、相互依存的な対人関係にあっては、怒りの表現だけでなく感情を経験することすら抑制されることを示している。このような、日本人とアメリカ人の感情経験の違いは、感情スク립トの違いということでも説明できる。異文化接触場面において、そういった感情スク립トが表面化することがある。

II 異文化接触と感情

感情スクリプトの衝突

異文化接触において経験する違和感については、海外に出向いた日本人が様々な国で経験した摩擦や戸惑いの事例（国際行動学会, 2004；渡辺, 1995）、日本に在住の外国人と日本人の間のすれ違いや行き違い、誤解など（大橋他, 1992；西田, 2003）多くの文献で事例が紹介されている。程度の差はあるが、戸惑いや違和感を感じることも、情動的な反応である。こういった例では、違和感の原因について、文化間のコミュニケーション・スタイルや、行動様式の差、あるいはより深い価値観や信念の違いなどによるものと説明されている。個人が内面化した文化スキーマの差が原因であることを検証するため、スキーマ摩擦という観点から数量的に比較を試みたものもある（西田, 2003）。確かに、異文化間コミュニケーションは異なったスクリプトを内面化した人同士の接触であり、異文化間のコンフリクトをその感情スクリプトなどスキーマの衝突と見ることができる。文化的スキーマの比較研究は、異文化コンフリクトの原因の可能性を探る上で有効ではあるが、実際に人と人が接触したときに、どの言語を用いてコミュニケーションをし、その結果どのような適応行動や意味の交渉がおこるかを見るものではない。また、異文化の狭間で生きる人々、例えば、家族内に異文化を抱えた人々、そして二言語使用者（以後バイリンガル）のように、一個人の中に異言語異文化を持った人々が経験する心理現象や社会的相互作用を説明するためには、文化を固定的に考えないアプローチが必要である。

第2言語習得と文化的スキーマ／スクリプト

第2言語の習得とスキーマやスクリプトはどのような関係にあるのであろうか。言語は単語とそれを組み合わせるルールを知っていれば、使えるというものではない。言語の使用は、具体的な社会的・知的活動の中に埋め込まれており、言語を使うということは、こういった活動に参加することである（Lantolf & Thorn, 2006）。第2言語を使用する際のスキーマ・スクリプトの問題は、あまり調査がされていない上、言及されることすらあまりない。人は第2言語でコミュニケーションをする際、第1言語を通して習得されたスキーマを移行（transfer）するのか、そして第2言語を用いたコミュニケーションを通して、徐々に第2言語文化の意味世界に適応していくのであろうか。あるいは、第2言語を習得し使うこと自体、第2言語を媒介とした実践（community of practice）に参加することであり、第1言語を媒介とした行為と異なるのであろうか。八島・田中（1996）では、第2言語を用いたソーシャル・スキルという概念を用いて、日本人の高校生がアメリカで対人関係を築いて行く上で、単独の単語や表現を知っているだけでは役に立たず、対人接触の中でおこりうる一連のスクリプトの中に埋め込まれた言語実践を行うことが必要であることを示した。これは、新たな言語文化での活動に参加す

ること自体が、スクリプトの習得であり実践であることを意味しており、友達がなかなかできないで悩む生徒に、媒介となる行動スクリプトの中で言語を使用することを促そうとした試みである。同時に異文化に移動しただけで、言語の習得に必要な、活動への参加の機会が用意されているわけではないことを問題提起した。

新たな言語において認知・行動レパートリを獲得し機能的には問題がなくても、違和感を感じることもある。すでに述べたように、ある感情表現については特定の言語でないとできないとさえ感じることもある。こういった多くの問題を考える上で、感情スクリプトは実に興味深い分析ユニットであろう。特にバイリンガルや言語習得途上にある人の感情スクリプトとその中に埋め込まれた言語との関係を調べることは、言語と文化の関係を考える上でも、文化と感情の問題を考える上でも、貴重な資料を提供すると考えられる。

III 二言語使用と感情スクリプト

バイリンガリズムと感情

グローバル化、国境を越えた人の移動が極めて頻繁で、2言語を併用する生活が特殊ではなくなっている今日、人々の多言語使用と感情生活の実態に対する興味がおこっている。多くの国では、多言語使用が日常的な現実となっており、今後この傾向は益々強まるとされる。バイリンガリズムの研究者のDewaeleとPavlenkoは、世界各地の多言語使用者1,039名を対象に、第1言語から第5言語のどの言語と感情がもっとも強く結び付けられるかについて、ウェブを用いて調査した(Dewaele & Pavlenko, 2001)。この調査では、習得度に関わりなく、多くのバイリンガルが、強い感情を表すのに第1言語を好むことを報告している(この場合の第1言語とは、母語と同じような意味合い、最初に獲得された言語)。また、子供をしかるときや反対に愛情を表現する場合、人を罵倒するときなどに、多くのバイリンガル使用者が、通常第2言語や第3言語を使っている、また非常に高い言語能力を有している、第1言語を好む傾向があると述べている(Dewaele, 2004; Pavlenko, 2004)。Dewaeleは第1言語以外の言語を「心的距離のある言語(the languages of distance and detachment)」と呼び、第1言語と同じように共鳴・共振しない(心に響かない)とする。逆に同じ響きがなく、感情的に遠いために、安易に罵声表現を使ったり、第1言語では感情的に言いにくい表現が第2言語のほうが言い易いということも(例えば日本語で「愛しています」の代わりに英語の“I love you.”を使う)ありうる。(一方で、第2言語による社会化を経験し、第2言語の方が感情表現がしやすいと答える人もおり、過剰一般化を警告している。)

なぜ人はL1でないと、感情が本当の意味で表現できないと感じるのか。これについてPavlenkoは、言語の感情性は神経生理学的なリアリティをもつ、つまり、言語は、ポジティブあるいはネガティブな自律神経の覚醒を引き起こすことによって、特定の感情を経験させる

と述べている。私たちが、第1言語社会化のプロセスにおいて、母語の単語や表現を習得するとき、単に単独の単語の指示的な意味を習得するわけではない。その語の含意、情意的意味合いや、そのときに起こった事、一緒にいた人、経験された感情などを同時に記憶するのであろう。例えば「悔しい」という単語は、悔しかった感情の経験と記憶のどこかでつながっており、時に「悔しい」というコトバの使用に伴いその記憶が帯電され、その感情が呼び起こされることもある。

バイリンガルが、強い感情を表す場合、第1言語を使う傾向があることはすでに述べたとおりであるが、これは、その言語で幼少期に感情スクリプトを獲得したことと関係している。バイリンガルがどの言語を好むかは、それぞれの言語を習得したコンテキスト（家庭・学校）によって、文化実践や知的な活動をその特定の言語で行ったことと関係するのであろう。

バイリンガルの感情経験の研究を通して、言語文化的に固有な感情の存在が実際にどのような意識化されるかも明らかにされている。これに加えて、それぞれの言語には表現しやすい感情とそうでないものがあり、多言語使用者は表現したい感情によって、異なる言語を使うことも報告されている。また、ある言語ではぴったりと当てはまる言語がないため、どうしても第2あるいは第3の言語になりがちということもある。Pavlenko (2002)によると、ある人が感情を表すのにどの言語を選択するかは、言語間の相対的習熟度、社会的コンテキストや、相手の言語能力、また、ある言語の主観的感情傾向（perceived language emotionality）によって決まるだけでなく、それぞれの言語のもつ、感情的・情意的リソースによっても左右される。例えば子供や恋人に対する親愛な呼びかけ語や愛称を豊富にもつ言語もあれば、子供に毎日10回、“I love you.”と呼びかけることが気軽にできる言語もあるので、その言語の特徴により、表現する内容が変わってくるという側面もある。つまり、バイリンガルの場合、一方の言語で表現しないものを、表現するもう一つの言語を得るのである。Dewaele (2004)は、バイリンガル話者が言語を切り替える理由のひとつは、表現したい意味が、その言語（文化）に属すからだという言い方をしている。

文化固有の感情についても、二言語使用者を対象とした調査で、ある特定の感情を表すのにコード・スイッチングが行われるなど、バイリンガルの感情生活の複雑な実態が報告されている。バイリンガルはこの意味で、感情スクリプトの切り替えなどを通して、日々、心理的に文化間の往来をしている存在である。こういったバイリンガルの心理を研究することは、どのように2つの文化が、時と場合に応じて表れたり、言語の切り替えに合わせて、文化的なフレームの切り替え（LaFramboise, Coleman, & Gerton. 1993）がおこなわれるかなどを明らかにしていくことができる。あるいは、フレームの切り替えではなく、二文化が影響しあい、融合した状態となる可能性もある。異文化への移住や移動を通して、二言語以上を使う人口が益々増えている現代においては、多くの人の内面化した心理的な「文化」が固定的ではなくなりつつあることを、バイリンガルの実体験は示している。つまり、北山がいうように心と文化が相互

構成するものであるゆえに、バイリンガルの経験は言語が深く絡んだこのプロセスの解明に役立つと思われる。

異文化コミュニケーションと文化化の問題

すでに述べた文化モデルや感情スクリプトが、第1言語の習得と社会化のプロセスを通して個人が内面化したものであり、規範的に働き、構成員の行動や認識の仕方や感じ方を制約するとなると、異なった文化を内面化した人との出会いで、すなわち、異文化間コミュニケーションにおいて、摩擦や誤解の原因になりうるであろう。そして、それは言語文化Aで社会化された人と、言語文化Bで社会化された人が出会ったことを想定した場合に、スクリプトの違いから予測される摩擦がおこりうることを示す。しかし、第2言語習得やバイリンガルの観点からは、いくつかの問題が生じる。まず第一に、これまでの異文化間コミュニケーション研究においては、現実にもそういった人と人が直接接触するとき、どの言語でコミュニケーションを図るかという点はあまり問題にされていない。しかし、実際には、日本人とアメリカ人がコミュニケーションを図る多くの場合、英語が使われるであろう。日本にいるアジアからの留学生と日本人の会話や日本企業に勤めるブラジル人と日本人の会話ならば、日本語で行われることが多いかもしれない。ヨーロッパ系の外資系企業の内部では日本にあっても、コミュニケーションの言語は英語であろう。もし、ある人がほとんどネイティブ・スピーカーなみに英語や日本語を使える場合、この人は対象の文化的意味空間においてかなり経験が豊富で、上に述べたような文化的実践や活動に参加している。そうだとすれば、すでに第2言語文化のスクリプトやスキーマを獲得しており、使う言語に応じて少なくとも表面的な行動表出を切り替えることができているのではないだろうか。そうすると純粋な文化AとBの接触というのは実際にありえるのだろうか。しかし、一方で、社会化の過程で、深く心に刻まれた感情のスクリプトの不一致は、違和感や不快感などの情意的反応を引き起こすかもしれない。

上記のスクリプトの問題に関連した、興味深い研究がある。ロシア語には、英語の“privacy”に相当する語がないこと、類似した語はあるが、プライバシーの侵害などという概念はロシア人にとっては未知のものであることなど、両言語文化の概念的違いについて確認したうえで、Pavlenko (1997) は、次のような実験を行った。プライバシーを扱った3分間のサイレント映画を制作し、これをアメリカ人とロシア人の被験者に見せ描写をさせることにより、privacyの概念的理解について調べたのである。すると最近アメリカに到着したロシア人のバイリンガルの被験者の中には、英語・ロシア語のどちらの言語で話した場合とも、映画の中で描かれている状況を女性のプライバシーの侵害というように描写をした人はいなかった。一方、アメリカに4～6年在住した人では、ロシア的な解釈とアメリカ的な解釈が混在し、アメリカの“privacy”という概念を専有 (appropriate) していることを示している。この実験では、第2言語の習得がスクリプトの変化につながったこと示しているわけではないが、文化に

ある程度の期間浸ることにより、第2言語文化のスクリプトを習得していく様子を示している。別の、やはりサイレント映画を用いた実験では、バイリンガル話者の英語のナレーティブにおいては、感情を表わす言語の使用において若干のロシア語の干渉は見られるが、だいたいにおいて英語のモノリンガル話者に近い感情の表現方法を使っていた。興味深いのは、母語ロシア語のナレーティブにおいて、英語の干渉が見られたこと、つまり、ロシア語の使用法に英語の影響が見られたことである。Pavelenkoは、彼らのロシア語が、もはや完全に母語話者的（fully native-like）ではないと指摘する。

この結果を先述の議論との関係で論じると、4～6年アメリカに滞在したロシア人が第2言語の英語を使って、アメリカ人とコミュニケーションを図る場合、おそらく、英語的なスクリプトを用い、また言語表現においても、強い干渉を受けずに話すので、文化的スキーマの文化差から予測される困難はさほど起こらないであろう。一方、ロシアで英語を学習し、アメリカに到着したばかりの人は、スキーマ・スクリプトの文化的相違に戸惑う可能性がある。しかし、海外に滞在しなくても目標言語の習熟度を上げることはできるので、ここに、標準テストで測定されるような、「英語習熟度（proficiency）」が関わると、ミス・コミュニケーションの要因は複雑化する。よく言われる「言語はできても社会文化的能力がない」という指摘は、語彙、文法だけを取り出して学習したような場合にはありうるが、通常言語が使われるコンテキストの理解を伴わないで習熟度をあげることが極めて難しいことを考えると、完全に切り離せるものではない。特に言語に内在した文化性（たとえば、日本語のように代名詞を落とせる言語とそうでない言語、brotherと兄/弟のように単語の指し示す範囲の違いなど）と、言語使用の文化性（謝罪の仕方、依頼の仕方など発話行為をどのように言語的に実現するか）は言語の習熟度と密接に関係する。一方、そういった語彙や言語使用が埋め込まれたスクリプトと社会的コンテキストを理解するには、また、そういった行動を促す文化モデルへのアクセスは、その言語文化コミュニティへの参加が前提となろう。

バイリンガルの経験は、バイカルチュラルのタイプに関して次のような可能性があることを示唆する—1）第1言語、第2言語を別々の認知・行動・感情レパートリーとして習得しており、状況により自由に切り替えることができる完全なバイカルチュラル、2）多くの状況で二言語を適切に使分けられることができるが、時に感情的な違和感を感じることがある、感情的には第1言語が優勢な場合、3）逆に第2言語の使用や習熟度が第1言語をしのぐため、第1言語のスクリプトにも第2言語の干渉が現れる第2言語が優勢な場合。これ以外にもその中間的な状態が多様であり、タイポロジーというよりコンティニュームとして理解されるべきであろう。バイリンガルの人の調査が示すように、日本人の外国語学習者など、第2言語習得途上にある人の多くは、第2言語では、感情的な切迫性を感じないかもしれない。強い感情や微妙な感情を表現仕切れていない可能性もある。一方で、相手に合わせて文化的スクリプトを無意識に転換している人もいる。

先述の問題に戻って議論をまとめると、異文化コミュニケーションにおいて、コミュニケーションを行う上で誰が第2言語を用いその習得度はどの程度か、また移住者などの場合、異文化滞在に伴うアカルチュレーションはどの程度進んでいるか、また性格や行動化傾向の個人差などにより、準拠されるスキーマやスクリプトは複雑な様相を見せる。それゆえ、バイリンガル/バイカルチュラルなど、第2言語の使用の心理的経験を調査することは、異文化接触におけるコミュニケーションを理解する上で重要な意味を持つであろう。

感情の表出とコミュニカティブ・コンピテンスをめぐる問題

第2言語習得途上にある初級の学習者の場合、目標言語文化の感情スクリプトにふれた経験も少なく、感情の表出に多くの困難が伴う。また、その困難の要因の特定も、上記に述べたような言語使用の心理も勘案すると極めて複雑な様相を見せる。アメリカに滞在した日本人高校生の事例(八島, 2004)から、この点を論じてみよう。

滞在先の家庭でホストシスターがクローゼットを勝手に開けてだまって自分の服を着ていくという話を記述した日本人の女子生徒ゆき(仮名)のケースである。ホストシスターはその行為を繰り返し行うのだが、ゆきは何も言えないでいる。ある日、ホストシスターはゆきが気に入っていたドレスに黒いしみをつけた。それでも彼女は何も言えない。怒りを表現することもできない。筆者が実施した質問紙のスペースでは足らずに余分に用紙をつけて切々と訴えるぐらいであるから、そうとう精神的には衝撃を受けているようだった。しかし、その気持ちを怒りの対象にぶつけることができずに悶々としている様子がうかがえた。彼女はつぎのように書いている。

何回も彼女に言わないと思ったけど、けんかになりたくなかったし、自分の英語に自信がなかったし、いつか彼女にhelpしてもらおうことがあると思って言えなかった。ずーっと彼女を見てて、私のあまり友達になりたくない人だと思ってよけいに彼女と話さなくなった。(中略)10月の終わり頃、彼女が私の一番大切にしていた服に黒いよごれをつけました。彼女は私に何も言わなかった。彼女の性格から謝るとは思いませんでしたけど、どうして汚したのかとか、汚してしまったことぐらいは言ってくれと思った。

この事例をまず比較文化心理学的な観点から考察してみよう。日本人/アメリカ人の学生を対象に、葛藤の解決法を比較した研究で、アメリカ人の多くが何らかの葛藤解決に向けた行動を起こすのに対し、日本人の学生は、「何もしない」、「自分の感情をコントロールする」、「自分ががまんする」など、消極的な対処をしていた(大淵, 1992)。また、その理由として、日本において人間関係は一旦傷がつくと修復しにくいと認知しているため、持続しかつ大切な人間関係においては、葛藤行動を控えるというものであった。つまり、この研究では、日本人の対

人スクリプトを社会化の過程で身につけた若者が、対人関係の維持に神経質になっている様子が示されている。上記の事例では、このような日本的なスクリプトを移行したと解釈できる。Ting-Toomy (1997) に準じると、個人主義的な葛藤解決の方法が必要な場面で、集団主義的な葛藤解決の方法を適用したことによる問題ということになる。

先に述べた、Markus & Kitayama (1991) の「相互協調的自己 (interdependent self)」「相互独立的自己 (independent self)」という自己概念からも、この事例を説明することができる。Kitayama (1998) は、アメリカの文化的コンテキストでは、怒りという感情は「独立した存在としての自己を確率するという意味で自己の力強さを含意している (p.95)」とする。Matsumoto (1988) は、日本では近い関係において、怒りはあまり表現されないばかりか、経験されないことすらあると述べている。実のところ、家族のような身内となると、むしろ「甘え」から、怒りの感情を直接的にぶつけることが多いが、学校の友達、先輩/後輩、職場での同僚など、家族ほど甘えられる関係ではないが、重要で持続する関係においては Matsumoto (1988) の指摘は当てはまるかもしれない。

上記の例においては、持続する大事な関係、また今後も世話になるかもしれない関係において、関係性に傷をつけることを避けたいという心理が働いたと解釈できる。相互協調的な自己は、対立を避け、強い感情を制御することが好ましいと考えるのである。この例では、上記の引用部分が示すように、注意が、自分の怒りの感情より、相手の感情や反応に向けられていることがわかる。自分の感情は表現できないまま、一方で相手から何か反応があると思いつているのである。自分の傷ついた感情を相手が理解するはずだという期待があるようにも思える。つまり日本の怒りのスクリプトの微妙さが、ここに関係しているという解釈が成り立つ。日本の文化スクリプトでは、怒りを大げさに表現せず、他者の前で自制することが求められる。その一方で、怒りを表現せず黙っていても「抑えているが、内心怒っているのだろう」という察しに依存することができる。逆に非常にうれしいことを表現するのも抑える傾向にある。その結果「内心とてもうれしいのだろう」という他者の推測の余地が残る。

しかし、第2言語習得の視点を入れるとまた異なった解釈がありえる。彼女の英語力がもっと発達しており、英語に自信があればどうであろうか。あるいは、文化的知識があり、自分の権利の侵害に対する意義申し立てをしなければならぬとか、自分の責任で葛藤解決行動をとるべき、というアメリカ的な規範やカルチュラルモデルを認識していれば行動は異なったかもしれない。また、そういったスクリプトを習得していなくても、不満や怒りの表現という言語の機能的使用を知っていると、対処法は異なったかもしれない。一方、同様の場面で相手と直接対峙して解決する日本人学生もある。つまり、第2言語での感情表現の問題は、文化的側面に、英語習熟度や外向性/内向性などの個人要因も加わり、複雑な様相を見せるのである。

IV 第2言語学習と感情スクリプト

第2言語学習者の感情表現やスクリプトなどの研究は、まだあまり行われていないが、第2言語においては、話者の感情を理解することが困難であることを実証したものなど、本論に関連する研究は散見できる。例えばRintell (1984) は、第2言語使用者は発話内行為としての感情表現の知覚に困難を持つことを示している。Rintell (1984) は、英語を第2言語として学習している人を対象に、2人の英語母語話者間の会話を聞いてもらい、表現されている感情の強さを評定させた。学習者の知覚は母語話者より劣り、言語習熟度の高い学習者は低い学習者より正確に感情を知覚することができたと報告している。また母語が異なる人を比較すると、アラビア語、スペイン語を母語にする人の方が、中国語を母語にする人より正確であったという。

Graham et al. (2001) は、日本人の学習者を含むグループを対象にした類似した調査で、英語の「態」に表れる感情の知覚において日本人が、スペイン人の学習者より正確ではなかったこと、さらにこの場合習熟度が影響しなかったことを報告している。この結果について、Dewaele & Pavlenko (2001) は言語間の文法的・文化的な類似性が両者の差の要因であると説明している。また、Pevlenko (2006) は、第2言語の習熟度の低さが原因で、感情面の誤解を受ける例を紹介している。

八島 (2002) の調査したアメリカに留学した高校生の例でも、ホストファミリーの中に、日本人の生徒について「ぶっきらぼう」「感情の表現に乏しい」「年の割に未成熟」などというコメントがよく見られたが、これは、第2言語能力の低さゆえに、英語での感情表現や、年相応の対人行動が十全でないため、このような印象を与えた可能性がある。また感情の表出の豊かさについては、文化による要求水準の差が関係する。

ここで問題となるのは外国語の学習者は、どの程度その感情スクリプトを獲得することが必要なかということである。異文化接触時の学習者の経験は、スムーズな対人関係の構築のためには、スクリプトの違いに気づいて調整する能力が必要であることを示している。一方で、こういった例は、外国語の学習者が習得すべきコミュニケーション・コンピテンスはどこまで含むのか、という問題を投げかける。最後にこの点について考えたい。

言語使用の規範性と政治

異文化への移動や異文化との接触経験、メディアを通しての間接的な異文化との出会い、あるいは第2言語の習得などにより、人間の心理はどのように変化し、その中で感情スクリプトはどのようになるのであろうか。すでに述べたように、目標文化との接触をとおして第2言語を習得し、自然な状況で使うということは、単に語彙と文法を習得するだけではない。文化的実践に参加することである。われわれが母語を日々の文化的実践に参加することで習得し、そ

の過程で共有されているスクリプトや文化的モデルを内面化してきたように、ことばは自然に使えるようになるためには、文化実践に埋め込まれた形で習得されなければならない。すると第2言語を習得していくこと自体、それがその言語を共有する人と支障なくコミュニケーションができることは、スキーマ・スクリプトの追加が必要となる。場合によってはその影響で第1言語のスクリプトの変容がおこる逆の干渉の可能性もある。

社会において言語のスクリプトの実行はコンピテンスやスキルとして規範的評価の対象になる。第2言語の場合も、実際の使用を想定したとき、コミュニカティブ・コンピテンスとか、社会言語学的コンピテンス、プラグマティック・コンピテンスが問題になる。第2言語の社会言語学的コンピテンス、コミュニカティブ・コンピテンスというとき、その言語が話される社会における文化的適切性・効果性を意味し、「英語が上手になる」とか「ドイツ語が上達する」ということの中に、その文化の規範への追従を内包する。それを能力差とする限りにおいて、母語話者と第2言語話者の間の力差が生じる。通常「母語話者のもつコンピテンス」が言語教育の目標となるからである。ひとたび、対象言語の話されている社会の中へ足を踏み入れると、言語は社会の中に置かれた自分の位置を示す指標となりうる（Norton, 2000）。

第2言語コミュニケーション能力を身につけるということは、この力差を埋める方向へ進むと同時に、いやおうでも、その過程において力差を意識せざるをえないという現実を含む。社会において「適切な言語使用」が社会的に優勢なグループを優遇し、その力差を再生産するしくみを批判的に分析する視点（ブルデュー, 1993）は必要である。同様に世界の言語市場における言語間の力差とある言語の母語話者と第2言語使用者の格差などの影響を見据えることは必要である。しかし、例えば英語の圧倒的な力とそれが母語話者に有利に働くという問題を認めながらも（津田, 1991）、いろいろな分野において、英語を駆使せずして、異論や抵抗も表明できない、意志決定にも参加できない時代にきているように思える。だからこそ、学習者に効率よく第2言語を学習させるプログラムの開発の必要性は高まる。第1 + 第2の言語を身につけることによる認知・行動・感情レパトリの広がりをめざしながら、批判的視点も含んだ言語認識（language awareness）の精鋭をめざすことが必要であろう。英語の場合、言語を教えるコンテンツとしてのクリティカルな思考の養成も議論されている。また、二つ以上の言語をもつことを一つの言語文化に縛られない自由さの獲得と考えることもできる。

比較文化的な研究はアメリカ人と日本人、ブラジル人と日本人というような文化における行動様式・スキーマ・スクリプトの差などを浮き彫りにしてきた。しかし、異文化接触の実践面での問題は、スクリプトの交渉を通してどの程度相互理解が可能かという点である。この中には誰のスクリプトに誰がどの程度あわせるのかという問題をはらみ、通常、第2言語を用いるほうが、第1言語のスクリプトにあわせるというのがデフォルトの設定である。その期待が第2言語教育に反映し、ポライトネスや感情表現などの規範的側面をどこまで教えるべきかという問題にも通じる。国際的言語市場でその地位のゆるぎない英語の場合、国際語になると

ということが、様々なスクリプトの融合を意味するのか？しかし、ことばが日々の文化的実践の中で使われ、そこへの参加を通して、コンピテンスが養われるとなると、それはどの程度可能なのか？英語スクリプトにみんなが同化していくのであろうか。あるいは、世界の英語話者は、感情のスクリプトをはじめとするさまざまなスキーマやスクリプトを英語でのコミュニケーションに持ち込み、英語でのコミュニケーションの実践を変えていくのか。その帰結として、英語をもちいた超文化的コンピテンスというのはいくらあるのか。疑問はつきない。

異文化学習としての第2言語学習

Tomaseello (1999) の言うように、人間が生得的に「相手の内側に入ってその人の視点から外の世界を見たり、その人をまねることができる存在」である以上、異文化背景をもったもの同士の接触においても、直接接合であるからこそ、相手の視点から自分自身を見、あるいは相手の見るように世界を見ようとするにより、さまざまな調整活動がある程度は自然に行われているに違いない。そしてそれができるのは、すでにそういったパースペクティブの取り方、すなわち基礎的な社会的認知能力を第1言語の習得を通して習得しているからである。そのような他者を通しての学びにより文化の一員になっていくことをTomaseelloは文化学習と呼ぶ。この第1言語の習得を基礎とする社会認知能力の上に、第2言語文化の習得はどのような文化学習をもたらすのであろうか。それは次のように、考えられる。第2言語の使用は、第1言語と必然的に異なったパースペクティブの取り方を要求する。第2言語を用いた異文化接合は、長年の使用で膠着したパースペクティブをゆるがせ、柔軟な視点の取り方を可能にする。異なったパースペクティブの取り方は、自らの行動を客観視し、コミュニケーションをメタ的にとらえることを可能にする。それは第2言語を用いない異文化接合でも可能だが、相手の言語を使える場合ほど、相手の内側に入ってその人の視点から世界を見ることはできないであろう。

おわりに

本論では、感情スクリプトという概念を用いて、バイリンガルの感情表現と第1、第2言語使用、および第2言語学習者の感情表現に関する研究を概観したうえで、最後に、第2言語・外国語学習と文化スクリプトの獲得をめぐる問題について考察を加えた。近年、日本文化とアメリカ文化という国境による文化の線引きがどの程度有効かという議論がある。感情経験だけに絞っても、メディアを通しての経験もありうる。国境を越えた人の行き来も多く、居ながらにして異なった感情スクリプトに出会う機会が増えている。また、すでに論じてきたように、二言語使用者が珍しくない現在の世界において、二言語使用者は日々文化間の往来をしている存在とも言える。こういった状況は、個人の文化化のプロセスにも影響を与え、結果として境界に囲まれた一枚岩の文化を想定しにくくしている。また、ポスト構造主義やカルチュラ

ル・スタディーズなどの影響で、文化の概念がゆらいでいる。本人がどのような位置取りをし、どのような線引きをするかで、文化は多様な側面をみせるという見方もされる。つまり文化は流動的で変化するものと考えられるようになってきた。しかし、言語は文化の実体化した側面であり、感情はリアルな、生物的な（その意味で実質的な）感覚を伴って経験される。それゆえ、感情経験は文化的スクリプトの内面化の指標になりうる。また、その変化や複雑性を見ることが出来る。さらに、異文化接触における対人葛藤の多くは感情的な側面を含むので、葛藤という形で表面化する心理プロセスを分析する上でも有効である。

今後、第2言語使用者の感情経験の調査を通して、バイリンガリズムとバイカルチュラリズムの関係に、ひいてはことばと文化の問題に関わる知見が得られる可能性に期待したい。

謝 辞

本研究（又は本研究の一部）は、平成16年度関西大学学術研究助成基金（奨励研究）において、研究課題「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールにおける異文化理解教育の実践と効果」として研究費を受けたものの成果として公表するものである。

引用文献

〈和書〉

- ブルデュー・P. (1993) (稲葉繁美訳) 『話すということ：言語的交換のエコノミー』 東京：藤原書店
土居健朗 (1971) 『甘えの構造』 東京：弘文堂
北山 忍 (1998) 『自己と感情』 東京：共立出版
国際行動学会編 (2004) 『文化摩擦における戸惑い』 大阪：創元社
西田ひろ子 (2003) 『異文化コミュニケーション摩擦』 大阪：創元社
大橋敏子・秦喜美恵・横田雅弘・近藤祐一 (1992) 『外国人とのコミュニケーションハンドブッカー
トラブルから学ぶ異文化理解』 東京：アルク
大潤憲一 (1992) 「日本人とアメリカ人の対人葛藤」 渡辺文夫・高橋順一（編）『地球社会時代をどう捉えるか』 東京：ナカニシヤ出版
津田幸男 (1991) 『英語支配の構造 日本人と異文化コミュニケーション』 東京：第三書館
八島智子 (2004) 『第二言語コミュニケーションと異文化適応』 多賀出版
八島智子・田中共子 (1996) 「ソーシャル・スキル訓練を取り入れた英語教育」 『異文化間教育』 10, 150-166.
渡辺文夫編 (1995) 『異文化接触の心理学』 東京：川島書店

〈洋書〉

- Cole, M. (1996). *Cultural Psychology*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
Clancy, P. M. (1986). The acquisition of communicative style in Japanese. In Schieffelin, B. B. and Ochs, E. (Eds.). *Language socialization across cultures* (pp. 213-249). New York: Cambridge University Press.
D'Andrade, R. G. & Strauss, (1992). *Human motives and cultural models*. Cambridge: Cambridge

- University Press.
- Dewaele, J-M. (2004). The emotional force of swearwords and taboo words in the speech of multilinguals. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 25, 2/3, 204-222.
- Dewaele, J-M. & Pavlenko, A. (2001). Web questionnaire. *Bilingualism and Emotions*. University of London.
- Gibbs, R. W. (1999). Taking metaphor out of our heads and putting it into the cultural world. In Gibbs, R. W. Jr. & Steen, G. J. (Eds.). *Metaphor in cognitive linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.
- Graham, C. R., Hamblin, A. W., & Feldstein, S. (2001). Recognition of emotion in English voices by speakers of Japanese, Spanish, and English. *International Review of Applied Linguistics*, 39, 19-37.
- LaFramboise, T., Coleman, H.L.K., & Gerton, J. (1993). Psychological impact of biculturalism: Evidence and theory. *Psychological Bulletin*, 114, 395-412.
- Lantolf, J. P. & Thorn, S. (2006). *Sociocultural theory and the genesis of second language learning*. Oxford: Oxford University Press.
- Lutz, C. (1988). *Unnatural emotions: Everyday sentiments on a Micronesian atoll and their challenge to Western theory*. Chicago: University of Chicago Press.
- Marcus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Matsumoto, D., Kudoh, T., Scherer, K., & Wallbott, H. (1988). Antecedents of and reactions to emotions in the United States and Japan. *Journal of Cross-cultural Psychology*, 19, 267-286.
- Norton, B. (2000). *Identity and language learning: gender, ethnicity, and educational change*. London: Longman.
- Pavlenko, A. (1997). Bilingualism and cognition. Ph D dissertation, Cornell University, Ithaca, N.Y.
- Pavlenko, A. (2002). Bilingualism and emotions, *Multilingua*, 21, 45-78.
- Pavlenko, A. (2004). "Stop doing that, ia komu skazala!: Language choice and emotions in parent-child communication. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 25, 2/3. 179-203.
- Pavlenko, A. (Ed.). (2006). *Bilingual minds: Emotional experience, expression and representation*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Panayiotou, A. (2004). Bilingual emotions: The untranslatable self. *Estudios de Sociolingüística*, 5, 1-19.
- Rintell, E. (1984). But how did you feel about that? The learner's perception of speech. *Applied Linguistics*, 5, 25-264.
- Schieffelin, B. & Ochs, E. (Eds.). (1986). *Language socialization across cultures*. Cambridge: Cambridge University Press
- Tomasello M., (1999). *The cultural origins of human cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Ting-Toomy, S. (2004) The matrix of face: An updated face- negotiation theory. In Gudykunst, W. B. (ed). *Theorizing about Intercultural Communication* (pp.71-92). Newbury Park, CA: Sage.
- Wierzbicka, A. (1994). Emotion, language, and cultural scripts. In Kitayama, S. & Markus, H. (Eds.) *Emotions and culture*(pp. 133-196). Washington, DC: American Psychological Association.
- Wierzbicka, A. (1999). *Emotions across language and cultures*. Cambridge: Cambridge University Press.